

新潮
社
片反

河二あ

盛十ふ

好四机

藏孝



新潮
社友
版

あ

ふ

れ

二

十

四

孝

河

盛

好

藏

あぶれ二十四孝

昭和35年12月10日 印刷

昭和35年12月20日 発行

©著者 河 盛 好 蔵

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式 新 潮 社
会社

東京都新宿区矢来町 71

電 話 (341) 7111—9

振 替 東 京 8 0 8

¥ 200

印刷・図書印刷株式会社 製本・神田 加藤製本
乱丁本はお取替えいたします

あぶれ二十四孝・目次

父よあなたは強かった.....	七
生んでくれとは頼まない.....	三
黙秘権の濫用.....	元
父の負い目.....	五
叱られる権利.....	三
親に似たくない子.....	七
愛情はさかのぼらず.....	四
ケチな父親.....	四
身体髪膚コレヲ父母ニ受ク.....	五
父親のはにかみ.....	六
親の職業.....	七
親も成長しつつある.....	三
孝子美談.....	九
勘当について.....	五
デモにゆくわが子.....	九

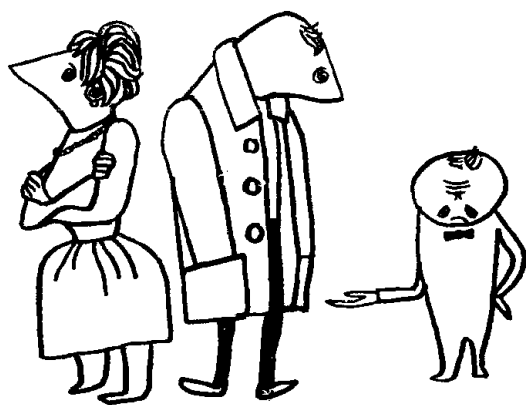
父親と母親	二七
親苦労する 子樂する	二〇
親馬鹿集会	一九
親不孝の思い出	一五
カエルの子はカエル	二三
親の目がね	二七
哀しき父	二三
子供は一人だけではない	二五
母と娘	二五
親の責任	二五
父母の再婚	二五
親の虚名	二五
無事な家庭	二五
孝行を忘るべし	二五
あとがき	二八

装幀・挿絵

花森
安治

あふれ二十四孝

父よあなたは強かった



ざっと見たところ、私たちの周囲には、ちかごろ子供に甘いおやじが大へん多くなった。もの分りがよくて、寛大で、子供の欲望はできるだけかなえてやろうと努めている。子供が夜遊びをしておそく帰ってきてても別にしからないし、それどころか、ときどきは子供をつれてバーを飲み歩いているような父親もいる。

年ごろになった子供が恋愛をして、勝手にお嫁さんや、おむこさんをつれてきても、好きなら結構だ、仲よくやりなさいと、アグレマンを与えるだけである。娘が結婚するときには、たとえ恋愛結婚であっても、

「イヤになったらいつでも帰っておいで」

といって、われわれのおやじの時代のように、一旦お嫁にいったからには、ここはもうお前の家ではないのだから、どんな辛いことがあっても我慢をして、二度と帰ってくるようなことがあつてはならないなどは決していわない。

こんなもの分りのいいおやじばかりが多くなってきたら、いまに、親不孝をしたいにもしようがなくなってくるだろう。いや、それよりも親孝行そのものの存在が怪しくなってくる。

もともと孝行という徳目は、子供が考え出したものではなくて、親が子供に教えたものであるから、そんな美徳を親が要求しなくなったら、世のなかから消えてしまうのが自然だからである。あたかも戦後の子供たちにとって忠義の觀念が全くなくなってしまったように、いまに、

「親孝行ってどんなこと」

と質問する子供がきつと出てくるにちがいない。

私は実をいうと、早くそんな世のなかになってくれればよいと思っているのである。親子のあいだにいろいろトラブルが起るのは、孝行という徳目があつて、親は子にそれを要求し、子は子でそのような義務から免れたいと反抗するからである。親子の関係が、友人関係と同様になつたら、ものごとはもつとスムーズに運ぶのではないだろうか。

しかしこの考えにはすぐ反対説が出るであろう。親と子のあいだはそんなに簡単なものではない。赤の他人となら、イヤな人間とはつき合わなくともすむけれども、親と子ではそういうわけにはゆかない。どんなにイヤな親でも、またどんなに気に入らぬ子供でも、親と子である以上は、知らぬ顔をしてすますわけにはゆかないと。

全くそのとおりで、問題のむずかしさはそのところにある。谷崎潤一郎氏の古い作品に『異端者の悲しみ』という名作がある。そのなかで、父親と終始いがみ合つてばかりいる息子は次のように述懐する。

「父を全然他人のやうに感じ、他人のやうに遇する事が出来たなら、彼はもう少し仕合はせになり得る筈であつた。自分を罵る者が他人であつたなら、彼は容赦なく罵り返してやるだらう。誤解する者が他人であつたなら、彼は直ちに弁解を試みるであらう。憐れな者、卑しむべき者、貧しき者が他人であつたなら、彼はその人を慰め、敬遠し、恵む事が出来たであらう、場合に依つては其の人と絶交する事も出来たであらう。ただ／＼其の人が彼の肉身の父であるために、殆んど此れに施す可き術がないのである」

これは子の父に対する感情であるが、これと同じ気持を、父もまた子に対して抱きうるはずで

ある。昔から、父と子の対立を描いた文学はたくさんあるが、そのほとんどが子の立場から書かれていて、父はいつも頑固でエゴイストで分らず屋で無教養な人間にされている。たしかに世間には分らず屋のおやじが多いであろう。現に私自身も決して、もの分りのいい父親ではない。

しかしそれと同時に、世のなかには、わからず屋の息子や娘たちもどっさりいることは確かである。そういう連中のいうことをいちいち無理ごもつともにきいていることは、果して彼らにとって親切なことになるだろうか。まして、彼らに理解されないことを、こちらの責任のように考えることはどうかであろうか。私たちおやじ族はそのような気の弱さからそろそろ解放されていないのではないだろうか。

フランスのある青年の書いた本に『おやじ、俺にも一言』(J・F・ブルボン著二) (宮教訳、紀伊国屋書店) というのがある。

この著者は一九三一年生まれだというから、もはや青年ではないが、その相手の父親は一九〇一年生まれだから、ちょうど私より一つ年上である。そこでこの生意気な息子のいい分をきいてみると、

「僕らは快樂を好んで、労働を嫌う。一度は力に屈服するのをこの目で見てしまった以上、僕らは団結して、あなたがたおやじたちを僕らの意見に従わせるぐらいの頭は持っているのだ」

「僕らは道徳なしですますことにする。僕たちにとって、恋愛の演ずる役目は、あなたたちの場合と同じだ。ただ違うのは、僕らは自分の体験や発見や計画をいちいち親に報告する義務があると思っていないことだ。恋をした時には、既成事実をおやじの前につきつける。気の向いた相手に恋をする。そこに理由があるとすれば、それは僕らの理由で、おやじの理由ではない」

「謝恩は不要だ！ 愛は謝辞とはなんの関係もないものだ。もし愛が感謝のお返しをもらったとしたら、出費以上を取り返したことになる。なぜ感謝を要求するのだ。まるでカフエのボーイがチップを要求するように？」

「僕らが好きなことは、恋、楽しく暮すための金をもうけること、異性と優しくふざけること、できるだけ少なく働くこと、頭を乱されない本を読むこと。とくに、ラジオとテレビにはすっかり惚れこんでいる」

いや恐れ入りました。断っておきたいが、われわれおやじ族には、ボーイがチップを要求するように、子供たちから感謝を要求したい気持は少しもないのだ。われわれは、子供から、

「パパ肩をもんでやろうか」

といわれても、あとがこわいからすぐ断ることにしている。無償の行為を彼らから期待することはできないからである。彼らがわれわれからそれを期待しないように。

老いては子に従えといわれるが、子に逆らわないのは、本当はそれがいちばん楽だからである。だが、われわれのおやじたちは決して子に従わなかった。老いれば、老いるほど頑固になった。そのために、こちらも逆らいがいがあったわけであるが、父と子のこの格闘がわれわれを鍛えたのだと私は思っている。現在のわが国の中年以上の文学者は、文学をやるために、父親と多かれ少なかれ闘ってきた人たちである。息子から小説家になるときかされて、

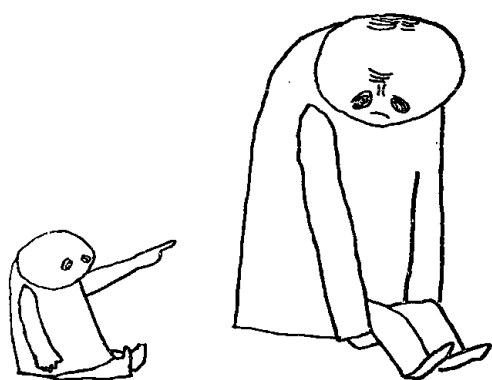
「よからう、しっかりやって、早く芥川賞をとってくれ」

などと激励するような理解のある父親を決してもたなかった人たちである。もしそんな父親を

もっていたら永井荷風も志賀直哉も存在しなかったであろう。現に安岡章太郎氏も書いている。「親にすすめられて、恋だの、愛だの、というものは恥ずかしくて書けたものではない」と。

親子のあいだは仲がいいのに越したことはない。しかし、これだけはゆずれないという線までも放棄して子に従うことは、本当の愛情といえるだろうか。われわれのおやじたちには、そのゆずらない線が多すぎた。それは本当であるが、しかしその線を頑として守った彼らの強さは、いまから思えば頼もしく、なつかしい。現在のわれわれ父親たちに最も不足しているのは、この強さではあるまいか。

生んでくれとは頼まない



生意気ざかりの子供が親に歯向かう言葉で、いちばん応戦に困るのは、

「そんな悪い息子を誰が生んだんだ。頼みもしないのに勝手に生んだんじゃないか」

というにくまれぐちであろう。これをやられると、大ていの親たちは、一瞬間だまってしまう。
まさか、

「お前を生もうと思っておふくろと一緒に寝たわけじゃないぞ」

というわけにもいかない。

本当はその通りなんだが、親としては、子供の誕生については神聖化しておきたい気持がある。子を生むということを厳粛な人間の行為と考えて貰いたいと思っている。それだけに、

「なぜぼくを生んだんだ」

と問いつめられると、こちらの秘密を見破られたような、いかにも責任がこちらにあるような思いをさせられるのである。

気の弱い母親なら、父親を横目でちらりと眺めて、

「そうでしょう、だからあなたが悪いのよ」

と、子供を生んだ責任は全部父親が背負わなければならないような顔をしないとかがざらない。たしかに私たちは、「誰も生んでくれとは頼まなかった」と子供に居直られると、返答に窮するところがある。まして、

「あたしの鼻の低いのはパパに似ているのよ。どうしてもっと美人に生んでくれなかったの」
などとからまれると、ただただ閉口する以外にはない。